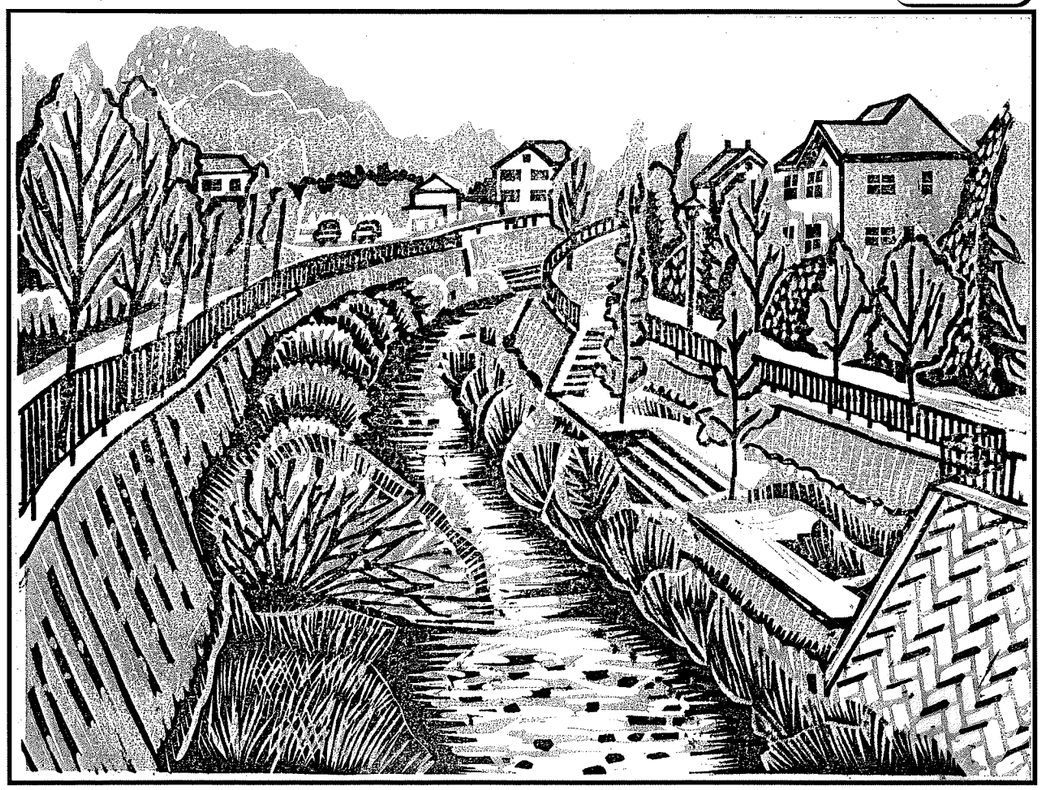
いたちがわらばん

鼬川・独川・川原番・瓦版　冬号



版画　宗森英夫　　桂橋より下流をのぞむ

いたち川から未来が見える

世紀末になって、やっと、愚かな私たちにもようやく二十一世紀が見えてきた。

私たちが生きてきた前世紀は科学に裏付けられた合理的な近代精神を基盤とするものであった。確かに、めざましい文明の発達が生活を利便にし、病気を克服し、様々な物質を与えてはくれた。しかし、それで人間が幸せになったかというと、必ずしもそうでないことがわかってきた。

戦争の傷跡はいまだに癒えず、人の心はすさんでいる。経済の効率化や利潤の追求が、もともと自然の一部であった人間の尊厳をさえ破壊しつつある。戦争と文明の発達、そして経済大国の結果を、もっと反省する必要がある。

＊　＊　＊

今世紀の前半を支配するかも知れないＩＴ革命やロボット化が人間の精神を豊かなものにするとはとても思えない。

前世紀の科学は、一見、合理的に見えて、「反自然的」であった。そこでは、自然の秩序や法則性は無理やりにねじ曲げられ、無視された。

虫や魚や鳥がいて、時には洪水すら自然の循環のためには必要であり、人の傲慢をたしなめる。そういう自然のなかで、日本人は生きてきた。だから「花鳥風月」に象徴される風雅な精神構造が創出された。

＊　＊　＊

人間は、計算と定規を使って、川を真っ直ぐにし、埋め立て、固めてしまった。経済効率と技術的にはそれは正しかった。だが、もっと深い自然の法則性からははずれていた。

人はおごりを捨てて、早急にその償いをしなければならない。さらに許しを受けて自然の一部に戻らなければならない。そういう「合自然的な秩序」がこの新世紀の主流にならねばならないと「流れ」を見ながら思う。

（栄地域史研究会　副会長　菊田清一）

切りとり線

この部分を切り取ってファイルすると便利です。

学校の活動報告（２）

野七里小学校５年生より

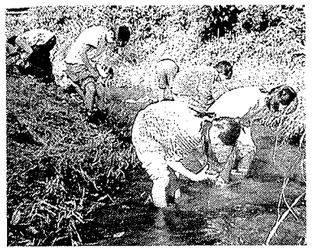
いたち川はみんなの川！！

昨年の秋、野七里小学校の５年生はいたち川ととても仲良しになりました。昇竜橋付近の川に入り、いろいろな生き物をみつけたり、今までいたち川で遊んだことのない人たちも何度も川へでかけました。すると、いろいろなことがみえてきたのです。

いたち川には横浜で数少ない生き物がいること、川を守っている土木事務所の存在、愛護会の人たちのこと、そして昔はすごく汚い川だったことなどをはじめて知りました。

そしていたち川がもっときれいな川になるにはどうしたらよいのか、みんなで話し合いました。川に落ちているゴミを拾う人もいるけれど捨てる人だってまだまだたくさんいることも事実だし、川につながっている雨水ますに洗剤を流していることも多いようです。また地域の人に話を聞いたら、川に行ったことがない人もたくさんいました。その中には川はきれいになってほしいけれど、どうしたらよいかわからない人もたくさんいました。わたしたちの中にもこのままではきれいにならないのではないかと考える人もでてきました。でもせっかく仲良しになったいたち川は自分たちだけでなくみんなに仲良しになってほしいと思いました。そして一人一人が川を汚さないように意識して気をつけていけば時間がかかっても必ずもっときれいな川になるという希望もみえてきました。川がきれいになるかどうかは人しだいなのです。

そこでまず自分たちでできることをしていくことにしました。まず、ゴミは捨てません。そして、遊びに行ったときには帰りにゴミを拾っています。またこれから地域の人にいろいろなことを知ってもらい、ゴミを捨てないようによびかけていきたいと思っています。



わたしたちの身近にある川がみんなの愛する川になってくれることを願っています。

（５年代表
一色絵美理、斎藤幸佑、田口茜、古川憲治）

愛護会の活動報告（２）

八軒谷戸水辺愛護会（神戸橋～長倉橋）より

発　　足　平成１０年７月
会　　員　１６名
活動範囲　神戸橋～長倉橋までの水辺と、長倉町の展望広場一帯
主な活動　河川清掃　　毎月
　　周辺の草刈り　６月・１０月

河川の清掃は毎月一回、神戸橋より上流に向かいゴミを集める。発足当時は大型ゴミ（自転車など）もあり一回の清掃でトラック２台ぐらいのゴミがあったが、最近は軽トラック１台分ぐらいですんでいる。周辺がきれいにされていると、ゴミを捨てにくいのか捨てられるゴミも減ってきているようである。

年２回の草刈りは草払い機で行います。

最近は付近の野七里小学校、上郷南小学校の生徒も清掃に参加してくれました。

神戸橋から長倉橋の間の周囲には耕作している畑が多く、周辺散策に来る方は畑に入ったり作物をとったりしないようお願いいたします。

（森　雅宏）

発行年月
2001年1月
（通刊 12号）

発行：独川ＯＴＡＳＵＫＥ隊（いたちがわおたすけたい）
ＯＴＡＳＵＫＥ隊事務局：栄区役所区政推進課企画調整係　〒247-0005　横浜市栄区桂町303-19
TEL 045-894-8331　FAX 045-895-2260
栄土木事務所下水道係　〒247-0007　横浜市栄区小菅ヶ谷1-6-1
TEL 045-895-1411　FAX 045-895-1421
（お便り・お問い合わせはこちらまで）

いたち川上流の神戸橋より長倉橋あたりまでは八軒谷戸とよび、古い家が多く昔からいたち川とつきあってきた歴史があります。

現在、八軒谷戸水辺愛護会として活動している（４ページを参照）会の会長である森雅宏さんより八軒谷戸の紹介をいただきました。興味深い古を知ることが出来、これからの川とのつきあいを考えるためのメッセージにもなっていると思います。

八軒谷戸のいわれといたち川

図の■で表示されているところが、いたち川に沿って昔からある家々で、現在水辺愛護会の会員になっている家です。

図の中心付近を縦断している道路が環状４号線です。昭和１３年に、小菅ヶ谷に海軍燃料廠が設立されたのに伴い、横須賀－燃料廠－厚木飛行場線国道建設が計画され工事が進められました。それまで上郷（以前は上之村）を通っていた金沢道は横浜の屋根と呼ばれる相武国境の山坂を越えるしかありませんでした。それが相武隧道によって金沢まで車が通ることになりました。

それ以前は谷あいのいきどまりの谷戸で、その戸数がわずか八軒ほどであったため、このあたりが八軒谷戸と呼ばれていました。当時の八軒が今はどの家をさすのか特定できませんが、一番奥の家は屋号からわかります。

川の話からはずれてはいますが屋号の話をさせていただきます。図の家々に書かれている上の行が各家の屋号です。この屋号がいつの頃より用いられていたかは定かではありませんが現在でも地域では同姓の家が多いので重宝しています。

それぞれのいわれは右に示す通りです。特に調べたわけではないので間違っている部分もあるかもしれません。

さて、これでおわかりのように、八軒谷戸のいたち川沿いの家々は代々この地に住み主に農業をなりわいとして生活してきました。近年の宅地開発により山は削られ、谷は埋められ新しい住宅地と姿を変えました。いたち川の源流、横浜の屋根と呼ばれる相武国境の山々に囲まれた交通不便なこの土地に生活してきた愛着をもってこれからも川に接していきたいと思います。自然に優しい、環境に優しいなどと言った思い上がりではなく、そこに川があるあたりまえ、私たちがそこに住んでいるあたりまえでゆきたいと思います。

※上郷町在住の長瀬栄雄氏の「わたしたちの町、上郷地区の歴史について」を参考させていただきました。

- **薬師堂（やくしどう）**
  このお宅の横に薬師如来を奉ったお堂があったためと思われる。現在も薬師堂は現存するが場所は少し移動している。
- **薬師堂の上（やくしどうのうえ）**
  前述の薬師堂の上に家があった。
- **はねつるべ**
  はねつるべ式の井戸があったため。昭和初期頃まであったときいている。
- **先達（せんだつ）**
  御獄山信仰の参詣の案内（先達）を勤めていたため。
- **芝の下（しばのした）**
  大芝原という字が上郷にありその下の所を意味すると思われる。
- **立野（たての）**
  ここでの野は山嶺の傾斜地もしくは山を表していると思われます。この家の元はかなり山の上にありました。
- **神戸（ごうど）**
  「ごうど」は関東・中部地方を中心とする地名で、柳田国男は「カワド（川処）」で徒渉場を意味するという。「新編相模国風土記稿」によれば鍛冶ヶ谷口（現在の中野信号付近）にあった白山神社が正中元年（1324年）神戸（ごうと）に遷座したといわれ、その際地名も移ったといわれます。
- **新家（あたらしや）**
  この文字を、にいや、しんや、と読む場合もあり多くは分家により新しくできた家という意味と思われる。
- **やまだや**
  不明である。
- **神主（かんぬし）**
  元、神主を勤めていたらしい。神社は不明。
- **井戸窪（いどくぼ）**
  元の家は山側に入り込んだ窪地にあったためと思われる。
- **下の井戸窪（したのいどくぼ）**
  井戸窪の下の家
- **向（むかい）**
  由来は不明。元の家は庄戸の遊水池あたり。
- **大谷戸（おおやと）**
  一番奥にあった家。この先は道らしい道もなく人家もなかった。
- **谷戸（やと）**
  奥にあった家のこと。
- **谷戸の前（やとのまえ）**
  谷戸の家の前。

リレートークその一
いたち川友情物語（ガーコは何処へ）

「とうとうガーコの姿が消えてしまったよ」暮れの最後の川掃除の日、残念そうにボソッとＳ・Ｈさんの口から漏れたこの言葉、これには深い訳がありました。

数年来、花の木橋周辺を縄張りにしていた白アヒルの一組にこの夏異変が起こりました。大雨が続いた後のある日、ガーコの姿が突然消えてしまいました。それを知ったＳ・Ｈさんは心配で探し回ったところ、下流の魚道近くの小さな草むらに一羽でジッとうずくまっているガーコを発見。「流されない様に頑張れよ」と声を掛けて帰ってきました。（大雨の時は階段に避難することを一番よく知っていたのに、羽か足を傷めたのだろうか、早く仲間の所に戻っておいで…と念じつつ）

数日後、三羽の白アヒルの姿も花の木橋から消えてしまいました。また探索に出向いたＳ・Ｈさんの見た光景は…何とガーコの傍らに寄り添うかの如く三羽の白アヒルがいるではありませんか。すっかり感動したＳ・Ｈさんは後日その話を私にして下さいました。

人の世は殺伐としたニュースが連日の様にテレビ・新聞で伝えられ、世も末かと思わせられます。そんな中での心温まる話に二人共胸が一杯になりました。厳しい自然の中を生き抜いて行く事は大変です。最近ガーコの姿は又見えず残された三羽は今もそこを離れずにいるという事です。

（私達に安らぎを与えてくれたガーコはどこかの中洲にきっと生きているのでは…と願いつつ）

（あひる）

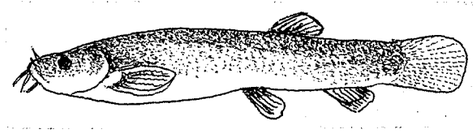
いたち川周辺の生き物⑪
ほそぼそと生き残っているホトケドジョウ

環境庁から絶滅危惧種の指定を受けているホトケドジョウが、いたち川にも生き残っている。湧水を集めた流れの緩やかな所に生息し、浮遊性や底生性の小動物を食べる。瀬上池の下のトンボ池や荒井沢の奥の田圃など、谷戸の一番奥に住んでいる。いたち川流域でも、宅地造成に伴い、丘が削られ谷戸が埋められ、ホトケドジョウの生息地は激減している。

体は細長く筒状だがやや寸詰まりであり、頭部は扁平である。口ひげは四対あり、うち三対は上唇にあり、一対は鼻孔から発達したものである。鱗は楕円形で体側全体をおおう。体色は赤味がかった黄褐色で暗色の斑点が密にある。体長は約六センチ。

産卵期は三～六月で、一尾の雌を数尾の雄が追尾する。卵は球形で水草に粘着して、二～三日で孵化する。

瀬上沢上流ではドジョウ（口ひげは上顎に三対、下顎に二対で十本ある）も住んでいるが、田圃がなくなった現在では、かつてのようには見られなくなった。ドジョウ鍋に使われるのはこの種類である。いたち川本流には、砂地を好むシマドジョウ（口ひげは六本）も生息している。



（いもり）

切りとり線